

ソ米関係史(1939-1945年)に関する予備的研究

駒村 哲 社会科学教育講座

キーワード：第2次世界大戦、ローズヴェルト、スターリン、アルヒーフ

はじめに

第2次世界大戦期の米ソ関係は通常「大同盟」の時代と呼ばれるが、それは米ソ両国がヒトラー・ドイツを共通の敵として戦ったからである。本稿では米ソ関係史において最も注目される時代のロシア側史料状況についてみたい。

新しいアルヒーフ文書・史料集が第2次世界大戦期のソ米関係史に費やされ⁽¹⁾、セヴァスチャノフアカデミー会員により思案され、彼の監修下国際基金『デモクラチヤ』⁽²⁾により出版される、20世紀両国関係の歴史文書シリーズを多数継続している。本巻編者の前途には彼らが打ち立てた自分たちに対する高いバー、すなわち未刊行文書のみを利用するということを考慮に入れてとりわけ困難な課題が控えていた。問題はソ米関係の検討される期間が世界の研究者の関心を引きつけることにある。ロシアではこのテーマでかなり大量の文書が公表された、1941-1945年大祖国戦争期のソ米関係2巻本、モスクワ、テヘラン、ヤルタ、サンフランシスコ、ポツダムでの国際会議史料集、大戦中のソ米指導者の往復書簡集、1942年5月のソ米交渉に関する文書。その他、少なからず興味深い文書は、『対外政策文書集』シリーズで公刊された第2次世界大戦開戦当初のソ米関係に関するもの、またセヴァスチャノフアカデミー会員監修下に出た『ロシアと米国：経済関係1933-1941』の文書集である⁽³⁾。換言すれば、この時期のソ米関係はおそらくその歴史全体のなかで最も文書化されている（文書で裏づけられている）のである。しかしながら、文書集の著者は350以上の新しい文書を見つけだし、学術使用するのに成功した。こうした史料は本格的に1939-1941年初めの『冷たい平和』から反ファシズム闘争の戦時同盟と終戦頃に生じてきた最初の同盟亀裂までソ米関係が被った、急激な変容についての知識を確かめ、理解を深めるものである。

文書集のもとになっているロシア連邦外務省ロシア対外政策アルヒーフの巨大な文書コレクションの完全かつ全面的な研究により、刊行は高度な学術レベルに達する。編者たちは綿密に、多くの知識を持ってモロトフの文書課と彼の次官たちのフォンド、米国に関する報告書を検討し、研究者にとり興味深い重要なものの中から文字通りごくわずかを選び出した。公表される文書はそのジャンルに従えば様々である、両国の公式代表の会談記録、外交往復書簡（覚書、メモ、手紙）、在米ソ連外交代表及びソ連外務人民委員部米国部の情報・分析史料、対米関係に関する外務人民委員部幹部の部内のやりとり。外交暗号往復書簡のみが足りない、残念ながらさしあたり研究者が入手不能のままである。

文書集で呈示された文書の内容はジャンルだけでなく、テーマでも多種多様な点で注目される。それらは同盟協力のすでに知られている中心的な諸問題—第二戦線、レンド・リース、戦後世界構築、ソ連の文書刊行で以前は十分な描写が見つからなかった両国関係のいくつかの問題などにも触れている。それらに関係する問題には、日本の軍事目標攻撃時に極東ソ連に不時着し、ソ連で拘束され、その後密かに米国へ送られた米国人パイロットたちの件もある。文書集の文書—米・日の代表との会談記録、職務上のやりとり—は同盟国米国に対してソ連の責任を果たすとともに、1941年のソ日中立条

約侵犯に対する報復行動に日本を走らせないようにソ連側は動かなければならなかった、その複雑な外交的立ち回りについて鮮明なイメージを与えてくれる⁽⁴⁾。

戦時協力の他の問題ではじめて文書集の中で詳細に取り上げられるのは、1944年ソ連領土であるウクライナの飛行場から米国機がドイツの目標に対する往復（貫通）爆撃を組織・実行したこと（コード名『フレンチク』作戦）に関係するものである。ソ連にある米軍事基地での数千人のソ連軍人と米国軍人との緊密な協同作戦のこうしたユニークな経験は歴史的意義を有するだけではない。この作戦はすでにロ・米の歴史家により研究されたけれども⁽⁵⁾、広汎な読者はロシア連邦外務省対外政策アルヒーフからそれに関する文書に出会う機会をはじめて与えられる。

文書集で新たな意義を得たもう一つのテーマ、それは大戦中のソ米経済協力とその戦後期への発展プランである。この件で米国代表との公表される会談記録、両国交渉の報告書は、戦時中のこうした協力の規模と形態（とりわけ石油・化学工業の分野で）、レンド・リースの輸送を含めてその組織・技術面について我々の理解を補い、具体化してくれる。今日のロシアと米国との関係に照らしても教訓的である、両国間の経済協力関係の歴史でその活動範囲において前代未聞の実際的な実現のために必要であった外交及び経済活動を文書は再現することを可能にする。外務人民委員部の情報・分析史料（文書第193-194号）と組み合わせると、これらの文書は戦後米国との通商・経済関係発展にソ連側が重大な関心をもっていたことを証明し、まさにそれにより戦争終結で経済協力削減の主なイニシアチブはソ連から出たものではないと考える研究者の見方を強調する⁽⁶⁾。

そのほか文書集の文書は領事問題、社会接触、ソ連の権力と米国のメディアとの相互関係、報償及び訴訟問題、各種事件のようなソ米関係のあまり知られていない側面も明らかにする。こうした一見技術的に見える問題もそのうちに政治状況を反映して今度は両国関係に影響を及ぼすような両国関係の本格的な生地をなすかもしれない。

新しい文書は1939-1945年のソ米関係発展のすべての段階を扱っている。きわめて興味深いのは、1939年のソ独協定とソ連の対フィンランド『冬戦争』に関連して、両国間の関係が急激に悪化した最初の時期（1939年9月—1941年6月）の史料である。ソ連対外政策の急転換はソ連外交による米国の役割と政策の厳しい再評価を呼び起こし、米国の目には潜在的同盟国から新たな世界戦争に向けて準備している仮想敵国に変わった。ここで1番特徴的なのは、ウマンスキー全権代表の政治書簡とグロムイコ全権代表参事官の書簡（文書第9、10、13号）であり、ローズヴェルト大統領政権の政策及びソ連との関係見通しの否定的かつ明らかに偏見のある評価を与えるものである。

同時にこの時期に関係する文書集の他の文書が証明するように、ワシントンでのウマンスキーとウェルズ国務次官との会談記録及びモロトフとスタインハート駐ソ米国大使との会談記録—ソ連外交はワシントンとの対話を慎重に断たないようにし、まるで将来米国との関係を蓄えておくようであった。米国側で類似の立場をとったのはローズヴェルトであり、そのことがその次の段階で両国関係を比較的早急に正常化するのに役だった。

ドイツのソ連邦攻撃は世界の軍事・戦略状況全体を劇的に変えた。ソ米には共通の危険な敵が出現し、この脅威が両国接近と反ヒトラー連合形成のお膳立てをした。こうした目的の命令的性格にもかかわらず、文書が強調するように、ソ米協力の進み具合は際立ったプロセスであり、出来上がった相互のイメージとイデオロギー上の反感を両国が再検討する必要があった。相互理解、互いに利害を考慮する能力はすぐには身に付かなかった。はじめて公表される1941年8月23日付モロトフの代理であるロソフスキーの報告書（文書第47号）が物語るのは、ソ連の（もっとも英米と同様）外交は『大西洋憲章』に基づく、戦争遂行や戦後世界組織の共通原則に関して合意に至るのがいかに困難であった

かということである。

反ヒトラー連合結成の最初の道での主要段階—ローズヴェルトの右腕ホプキンスのモスクワ訪問、3大国代表のモスクワ会談（1941年9月30日—10月2日）、米英の対ソ供給開始、ソビエト連邦にレンド・リースを拡大すること—はロシア及び外国の歴史学ですでに十分文書が整っている。しかし文書集の史料はこのプロセスに新たな境界と差異を付与する。外務人民委員部米国部の文書『米国のソ連援助問題について』（文書第48号）^(*)と『第1議定書』（文書第73号）に基づく米英の対ソ供給約束履行に関するミコヤン外国貿易人民委員の文書はソビエト連邦援助問題についての米国内勢力配置の詳細な分析とこの供給経過の最も興味深い事実情報を含んでいる（なかでもこうしたデータと米国の統計を比較できる）。その他一見したところ、こうしたきわめて二義的な文書はワシントンによる自ら引き受けた約束違反に失望したソ連側の本当の気持ちを表現豊かに伝える。『米国政府代表は約束を気前よく与えて、その約束を無礼に破った』とミコヤンは伝えた（196頁）。米国供給の状況はまだすぐにはよくならなかつた。他の問題も未解決のままであった、なかでも文書集の史料が教えるように、ソ連側が粘り強く達成しようとしたバルト3国のソ連邦編入の承認である。それでもやはり、グロムイコの政治報告が強調するように、『多くの理由から1941年はソ米関係にとり歴史的なものとして評することができる。米ソ接近は現在のヒトラー主義との戦争の結末に大きな影響を有するだろう。両国は同じ陣営になった』（216頁）

ソ米関係にとり容易でなかつたのは、第二戦線開設及び英米護送部隊の縮小問題、その他の問題で重大な対立により注目される次の1942年。これはすべてソ独戦線の危機的状況下、両国関係にきわめて張りつめた空気をつくりだした。それとともに、1942年は反ヒトラー連合の最終的仕上げの年になった、すなわち英国との同盟条約締結と反侵略戦争遂行で相互援助原則に関するソ米協定締結。このプロセスの両国の性格を示す新しい文書を読者は見つける。その中で最も重要なのは、モロトフ、ロゾフスキー、ヴィシンスキーとローズヴェルトの個人代表ウィルキーとの会談記録及びスターリンとブラッドレー将軍との会談記録（文書第132号）。これまではこうした会談の米国側記録のみが公表されていた、周知のように、時々両者の会談記録は互いに異なっているので、今やそれらとソ連側記録とを組み合わせて、この重要な討議の全体像を組み立てるチャンスがある。

戦争経過中根本的な転機がモスクワ及びテヘランの会談後の1943—1944年に、ソ米協力の拡大・強化のための好条件をつくりだした。この時期の最も興味深い文書の1つは、我々の意見ではグロムイコの分析報告（1943辛彼は大使）の付録『ソ米関係の問題に関して』（文書第244号）である。その中で与えているのは戦時中のこうした関係展開の詳細な分析だけでなく、その将来発展の独創的な予想である。その際大西洋の向こうの相手と新たな建設的相互関係の影響下3年未満の間、グロムイコと彼の同僚の評価と専門性が被った進展の証拠として役立つ。

グロムイコは両国の共通利害の領域を次のように分けた—『枢軸』国の粉碎、戦後世界の維持（経済支配している米国にとり最も有利なように）、欧州諸国のファシズム統治形態の一掃と両国の通商・経済協力。それと並んで彼はソ米協力の障害となるだろう『よく知られた困難』を予見した、すなわちドイツからの賠償問題と東欧諸国の政治制度をめぐる食い違い、『バルト3国問題』、中・近東への米国の浸透をめぐる食い違い。彼は米国内の反ソ勢力側からの敵対的プロパガンダの影響とまた米国側がソ連経済強化に協力する気のないことを指摘した。しかしながら報告の全般的結論は楽観的であった。『おそらく合衆国と我が国との関係でときおり生ずるであろうありうべき障害にもかかわらず、やはり両国間協力継続の状況は戦後期にも絶対にある』

グロムイコの報告が直接対立するテーゼ、すなわちソ連外交のイデオロギー上の制約、米国に対す

るソ連の根深い敵意とこのローズヴェルトの協力政策に照らして絶望的な『ナイーブさ』の証拠として利用されるとき、今日米国同盟者に対するソ連外交の肯定的気運に注意を払わなければならない⁽⁷⁾。

グロムイコはその評価において孤立してはいなかった。ローズヴェルトの米国に対するまさにその新しい肯定的見方と米国との関係見通しは、はるかに有名な外交官—リトヴィノフやマイスキーにとっても特徴的であった。1944-1945年の多くの分析記録で彼らもまた安定した世界維持の不可欠の条件として戦後期米国との協力維持の可能性と必要性に立脚していた⁽⁸⁾。残念ながら、戦時中のリトヴィノフの『米国』史料はロシア連邦外務省の対外政策アルヒーフには、したがって文書集には少ししか呈示されていない、この時期そこに所蔵されているわずかなリトヴィノフ文書の中から一つ、すなわちソ連外交のベテランの分析スタイルの鮮やかな例である分析記録『米国との相互関係について』(1945年1月)ではその不足がますます忌々しく見える。

外務人民委員部上層部にこのような楽観的傾向が広まっている疑いのない事実は今後の研究にとり重要な問題を歴史家に提起する。まず第1に、いかにそれは終戦時のソ連最高指導部の志向と相関していたのか、またそれにどのような影響が及んだのか?第2に、この楽観的シナリオは同盟関係の好ましい政治情勢の結果なのか、それとも戦時中のソ連対外政策意図のもっと深い秘密を反映したものか?最後に、この見方を米国の類似のもの—ソ連との戦後関係見通しについての当時の米国外交代表のものと比較分析することは興味深いだろう。それは米国が有する刊行物や文書で判断すれば、全体としてはるかに悲観的であった。

この時期のソ連とその西欧同盟国との重大な不一致の1つはポーランド問題であった。文書集の史料はこの不一致の強烈さを証明する新しい文書を含んでいる。まず第1に、1944年8-9月のワルシャワ蜂起参加者を援助する問題で、この劇的な両者の衝突はモロトフ、ヴィシンスキーと米英のハリマン、カー大使との会談記録に残された(文書第251-253号)。この問題の別の側面—将来のポーランド政府メンバー—は1945年4-5月のワシントン及びサンフランシスコで『ビッグ・スリー』の外相会談で詳細に検討された(文書第298、303、304号)。こうした文書の公表はポーランド問題をめぐる外交闘争の複雑な様相を完全にかつ多面的に再現するのに役立つ。

この時期のもう一つの文書集の文書—1945年1月3日付モロトフとハリマン大使との会談記録(文書第266号)は戦後国民経済再建で米国から莫大なクレジット供与に関するソ米交渉史の理解のために重要である。まさにこの会談のときにモロトフはこのようなクレジット供与の提供条件を述べたソ連政府の覚書をハリマンに手渡した。こうした記録の歴史は研究者にとりきわめて興味深い。それに先だってワシントンでの3ヶ月にわたる交渉とモスクワでの困難な省庁間調整があった。クレジット協定の米国案はすでに1944年9月に準備され、外国貿易人民委員部の幹部と外務人民委員部の専門家により多少の条件付きで『全体として受け入れ可能』と見なされた⁽⁹⁾。外国貿易人民委員のミコヤンはその資料に基づいて国家防衛委員会の決定案をスターリンとモロトフに提起した。しかしながら、ゴスプラン議長のヴォズネSENSキーは協定案を批判し、(ミコヤンのメモによれば)『米国が提供するクレジットは我々に有利ではない』と述べた。

さらなる調整と練り上げが続いた結果、外務人民委員部は戦後再建でソ連の巨大な問題を強調した丁寧かつ親切なトーンでできた米国への新しい返答案を準備した。1945年のソ連発注割当に10億ドル、1946-1947年さらに20億ドルふっかけた⁽¹⁰⁾。国家防衛委員会決定案『米国とのクレジット協定について』は1944年12月5日政治局で承認された⁽¹¹⁾。アルヒーフでこの文書のその後の経過は追跡調査されていないが、ミコヤンは回顧録の中でヴォズネSENSキーの新たな介入とスターリンの支持につ

いて書いている⁽¹²⁾。

とにかく1ヶ月してこの文書はもう60億ドル要求に変わった。それに対するお願いの形ではなく、1945年1月3日モロトフがハリマンに手渡した米国人に対する借金の形で。その中で提起されたクレジット供与の具体的条件の提示は以前了解されたものとは目に見えて異なっており、米国側にとり受け入れられないのは明らかであった。まさにそれにより、戦後ソ連経済再建のために本格的な意義を有した米国からの長期クレジット受取の現実的チャンスが失われたとミコヤンは何十年後に考えた⁽¹³⁾。もしかしたらそうかもしれないが、米国人研究者と米国のアルヒーフ史料が教えるように、どんな場合にもそのような措置へのワシントンの実際の準備はきわめて怪しいものであった⁽¹⁴⁾。どっちみち、この問題での最終回答には追加的研究と両国の新しいアルヒーフ史料の引用が必要である。

戦争の最後年は同盟国間関係の歴史においても一つの過渡期になった、今回は緊密な戦闘協力から戦後構築の問題で拡大する対立へ。共通の脅威が弱まるにつれて、同盟の道はますます分かれ、米国の最高指導者の交代がそれを促した。ローズヴェルトの死とトルーマンの大統領昇格は、米国の軍事・外交官僚の上層部で力をつけた、より強硬な対ソ路線のために閘門を開けた。文書集ではじめて公表される1945年4月23日付モロトフと新米大統領との会談記録はホワイトハウスのこうした強硬路線の最初のシグナルの1つと十分根拠をもって考えられる（文書第296号）。現在読者のところにはこの会談の3つの説がある—ポーレンが編集した米国の公式記録、トルーマン回顧録の中にある再話、パヴロフがとったソ連の記録⁽¹⁵⁾。それらを比較することで米国人歴史家のお気に入りの『私は彼に一発お見舞いした』というトルーマンの説がポーレンのより抑えた説やパヴロフの控えめな記録と比べてあまりにも芝居じみており、誇張されたものであることが立証されうる。しかし後者でも米国側との冷たさははっきりと感じられ、モロトフと彼のお供のグロムイコをいやになるほど驚かせた⁽¹⁶⁾。

協力と競争の同じ絡み合いはサンフランシスコの国連創設会議でも経験した。文書集の新しい文書—会議の作業手順、白ロシアとウクライナの国連加盟、アルゼンチンとポーランドの招待の問題（文書第299、300、303号）で『ビッグ・スリー』と中国の外相会談記録は、以前公刊されたこの会談の米国側記録と1970年代末に出版されたこの会議のソ連側文書とに基づくこうした話し合いに関する存在していたイメージを本質的に補完する。現在ロシア側研究者には今年50周年を記念してこの歴史的会議活動の新たな、より本格的かつ全面的分析の機会が生まれている、まして米国側研究者はもうそれをはじめている。

文書集にはまた旧イタリア植民地領土の信託統治にソ連が参加する問題に関する文書類もはじめて公表される。ソ連外交はこの方向で少なからぬ努力を集中したが、結局成功に終わらなかった⁽¹⁸⁾。公表される文書—グロムイコとステティニアスの往復書簡及びポツダムでのグロムイコとバーンズの会談記録（文書第324、326、342号）は直に諦めることになるのであるが、この点で米国は本当にソ連側の気を引くように努めたというロシア歴史学の説の正しさを確認する。

文書集の文書が扱うソ米外交相互関係の最後の主要ラウンドはソ連の対日参戦にかかわるものである。ここで研究者の関心は8月11日付（文書第352号及び付録）モロトフとハリマン及びカーとの会談記録に確実に引きつけられる、この時外務人民委員はマッカーサー将軍と並んで対日連合軍の『共同司令官』としてヴァシレフスキー元帥を任命するよう米国側に働きかけるという失敗した試みを行っていた。この文書の公表によりモロトフ及び彼の補佐官とハリマンとの電話会談に続いた後の記録を補うことで得る、それがなければこの外交エピソードの結末はあまりはっきりしなくなる⁽¹⁹⁾。

文書集のこの短い内容紹介でも、反ヒトラー連合の両指導的大国間関係と第2次世界大戦の外交史に興味のある読者には大きな学問的・実際の意義が見える。大勝利の60周年記念前夜にそれを出版す

ることが文書集に緊急性を追加する。最近頻繁になったその歴史的意義を過小評価する試みに照らしとりわけ重要である、大同盟の創設と機能のユニークな歴史経験について、文書は説得的に物語る。

本巻の重要な長所はその参考資料と装丁の高度の専門的完成度にある、すなわち『不都合な』箇所（ソビエト時代の立派な刊行でもお目にかかった）の但し書きのない例外はなく文書は刊行され、詳細な注釈、事項別・人名別索引、公表された米国側説への要参照箇所の指示が付けられており、それらは明らかに学術目的で出版物の利用を容易にするものである。

疑問の余地なく内容が豊富であるにもかかわらず、検討される本巻は明らかな脱落が残っている公表された文書をもとに研究テーマを未だ片づけていない。例えば、1945年6月のホプキンスのモスクワ訪問時、スターリンと彼との最重要の話し合いの完全なソ連側記録を歴史家は今まで持っていない。戦時中のソ連の軍事協力の歴史には文書で裏付けられたものが足りない、当時外交暗号やりとりの機密解除が多く興味深いものを予言する。しかしどんな場合でも文書集はこの大きな仕事において重要な貢献であり、ソ米関係史の豊かな文書遺産の本質的部分になるだろう。

おわりに

最後に本稿で取り上げた書評論文を手がかりにして、『ソ米関係史(1939-1945年)』の史料的特徴について若干コメントしたい。

まず第1に、これは米ソ関係の歴史研究だけでなく、第2次世界大戦史の研究においても今後基本的史料集として不可欠ものである。

第2に、従来、米国側史料を中心に議論されてきたテーマにおいても、ようやく本巻（ロシア側）のアルヒーフ文書・史料との比較研究が可能になるだろう。

注

(1) [1] なお本稿は次の書評論文を訳出紹介したものである。

Печатнов В. О. СССР и США в 1939-1945 годах. Новые документы (Новая и новейшая история, 2005, No. 5. с. 156-162.)

(2) [2]

(3) [3] [4] [5] [6] [7] [8]

(4) [9]

(5) [10] [20]

(6) [21]

(7) [22] pp. 93-94.

(8) [11] [23]

(9) [12]

(10) [13]

(11) [14]

(12) [15] с. 494.

(13) [15] с. 495-496.

(14) [21] pp. 42-43, 56.

(15) [24] pp. 79-82. [25] pp. 256-258.

トルーマン回顧録では以下のような記述がある。

私がブレアハウスにモロトフを迎えたのは午後八時三十分であった。モロトフは公式の通訳パブロフを伴って来た。モロトフはスターリンからの私に対する書簡をたずさえてきて、私から直接友好政策を続けたいということを聞いてうれしいといった。

これは偉大な故ルーズベルト大統領が取り決めたすべての約束や協定を公平に守り、その路線に沿ってあらゆる努力をしたと思う、とモロトフに伝える絶好のチャンスであった。

モロトフは協調のためのよい基礎は、ダンバートン・オークスと、クリミアの決議にあると思うと述べた。クリミアの決議に関連して、もっともむずかしい問題は、ポーランドの問題である。これを適当に解決することは、米国の世論に与える影響上、きわめて重要であると私はいった。

ポーランドは米国から遠く離れているが、ソ連には隣接している。したがって、ポーランド問題は、ソ連には重大な問題だとモロトフはいった。私は大きな見通しからして、ポーランド問題は米国民にとって、将来の国際関係の発展の象徴となっていることを指摘した。彼はソ連の見解を考慮に入れば、この問題は容易に妥協点に達するものと思うと答え、ソ連政府はサンフランシスコ会議を重視しており、最近数週間の軍事上の発展と相まって政治問題がさらに重きをなしてきていると語った。

ヤルタにおいて決めた極東情勢に関する協定はまだ生きていますか、とのモロトフの質問に対して、生きていますと答え、ふたたびルーズベルト大統領が決めたいっさいの協定を実行するつもりであると繰り返した。私が近いうちにスターリン元帥に会いたいと述べるや、モロトフは元帥も私に会いたがっていることを知っていると答えた。……

モロトフが到着したときには、スティチニアス長官、ハリマン大使、ポーレン氏とリーヒー提督が私の部屋にいた。モロトフにはグロムイコ大使とパブロフ通訳がついて来た。挨拶後、私はまっすぐに要点を突いた。「米国政府は、ポーランドのすべての民主的な人びとの代表でないポーランド政府を作ることには賛成できません。私は、ソ連政府がワルシャワ政権の代表以外のポーランド政府の代表と協議をしていないことに対し、深く遺憾に思います。米国は他の国々と協力し、世界機構の計画を進める決心をしました」

ついでに私は、モロトフにつぎのメッセージを手渡し、それをただちにスターリン元帥に発送するように要請した。

『ヤルタにおいて一つの協定が成立した。その協定の目的は、現在ワルシャワで活動している臨時ポーランド政府を改造し、挙国一致の新しい政府を樹立することである。

ポーランドに関するクリミア決議は、民主的なポーランド人指導者の真の代表が、協議のためモスクワに招待されて始めて実現される。米国政府は、真にポーランドの民主的国民を代表する挙国一致の新しい臨時政府の樹立をもたらさないようなポーランド指導者との協議方法には参加できない。ポーランドに関するクリミア決議を実行しなければ、三国間の団結と従来通りこんごも協力していこうとする決意を著しく揺るがすことを、ソ連政府は認識すべきである』

「ソ連政府は、米英両国政府と従来通り協力していきたいと述べているではありませんか」とモロトフは強調した。

「協力していくという点については同感です。もしそうでなければ、ここで話をしていることが無意味になります」

「ソ連政府はクリミア決議を支持しています。しかし他国によってこの決議が廃止される場合、ソ連政府による違背行為であると見なすことに同意できません。ポーランド問題は隣接国のことだけに、ソ連政府にきわめて大きな利害関係があります」

モロトフが本論を避けるので、私は前にいったこと—米国政府はヤルタで決まったすべての協定を忠実に履行する決意であるから、ソ連政府も同じことをしてほしいということ—を述べて、その履行を要求した。私はもう一度米国がソ連との友好関係を希望している旨を述べたが、これはあくまで相互が協定を実施するという基礎においてのみ可能であって、一方的な基礎ではできないと語った。

「私の人生でこのようにいわれたことはない」とモロトフは語った。

「協定を実行しなさい。そうすればあなたはそんなふうにいわれることはありませんよ」と私は彼にいった。

(H・S・トルーマン著/堀江芳孝訳 加瀬俊一監修『トルーマン回顧録1』恒文社、1992年、78、81-82頁)

(16) [16] c. 258-259. [17] c. 107. なお [27] も参照のこと。

(17) [26]

(18) [18]

(19) [19] с. 135-137.

(補1) 本文に誤りあり。『対ソ経済援助問題について』ではなく、『米国のソ連援助問題について』が正しい。

参考文献

- [1] Советско-американские отношения. 1939-1945. Под ред. академика Г.Н. Севостьянова; сост. Б.И. Жиляев, В.И. Савченко. М., 2004.
- [2] Советско-американские отношения. Документы. т. 1-4. Под ред. академика Г.Н. Севостьянова. М., 1999-2004.
- [3] Переписка Председателя Совета Министров СССР с президентами США и премьер-министрами Великобритании во время Великой Отечественной войны 1941-1945 гг., т. 2. М., 1976.
- [4] Советский Союз на Международных конференциях периода Великой Отечественной войны 1941-1945 гг., т. 1-5. М., 1979.
- [5] Советско-американские отношения во время Великой Отечественной войны 1941-1945 гг. Документы и материалы, в 2-х т. М., 1984.
- [6] Документы внешней политики, т. XXIII, XXIV. М., 1998-2000.
- [7] Ржешевский О.А. Война и дипломатия. Документы, комментарии (1941-1942). М., 1997.
- [8] Россия и США: экономические отношения. 1933-1941. М., 2001.
- [9] Печатнов В.О. Бейсбол под Ташкентом. Интернированные американские летчики в СССР.—Родина, 2004, №. 8.
- [10] Орлов А.С. “Челночные операции” ВВС США с территории СССР. 1944-1945.—Новая и новейшая история, 1997, №. 6.
- [11] Филитов А.М. В комиссиях Наркоминдела.—Вторая мировая война: актуальные проблемы. М., 1995.
- [12] Геращенко, Аркадьев—Молотову. 20 сентября 1944 г.—Архив внешней политики РФ, ф.06, оп.6, п.18, д.178, л. 38-41.
- [13] Памятная записка.—Там же, л.93-95.
- [14] Молотов, Микоян, Берия, Маленков, Вознесенский — Сталину. 20. 11. 1944.—Архив Президента РФ, ф.3, оп.66,

д. 295, л. 197-200, 201-203.

- [15] Микоян А. И. Так было. М., 1999.
- [16] Громько А. А. Памятное, кн. 1. М., 1990.
- [17] Чуев Ф. Молотов—полудержавный властелин. М., 2000.
- [18] Мазов С. В. СССР и судьба бывших итальянских колоний (1945-1950).—Россия и Италия, вып. 3, XX век. М., 1998.
- [19] Печатнов В. О. Московское посольство Аверелла Гарримана (1943-1946 гг.).—Новая и новейшая история, 2002, No. 4.
- [20] Conversino M. Fighting with the Soviets. The Failure of Operation Frantic, 1944-1945. Lexington, 1997.
- [21] Patterson T. Soviet-American Confrontation: Postwar Reconstruction and the Origins of the Cold War. Baltimore (Md.), 1973.
- [22] Perlmutter A. FDR and Stalin: A Not So Grand Alliance, 1943-1945. London, 1993.
- [23] Pechatnov V. The Big Three After World War II: New Documents on Soviet Thinking about Postwar Relations with the United States and Great Britain.—Working Paper No.13, Cold War International History Project, Washington, July 1995.
- Полный текст записки И. М. Майского см.: Источник, 1995, No. 4.
- [24] Truman H. Memoirs. Year of Decision. New-York, 1955.
- [25] Foreign Relations of the United States, 1945, v.V. Washington, 1967.
- [26] Schlesinger S. Act of Creation. The Founding of the United Nations. New-York, 2003.
- [27] Geoffrey Roberts. “Sexing up the Cold War: New Evidence on the Molotov-Truman Talks of April 1945”, Cold War History, Vol.4, No.3 (April 2004), pp.105-125.

(2005年12月7日 受理)